

蔬菜の定植について

田村 勉

養分も充分吸収出来ぬから葉色が黄化し、又強い光線で日焼を起す等、その結果生長あるいは大切な花芽の分化発達が後れる。即ち植傷みが多く、収穫期が後れ、引いては減収を免れ得ぬ事になる。

苗の定植準備

一 苗の馴化法（ならし）

(1) 苗を冷い外気と、自然の強い光線に馴れさせる。

これは定植の約二週間前から行うべきで、出来るだけ最初の第一日目は曇天の日を選び、障子、ビニール等を取除いて馴れさせるのであるが、注意すべき事は第一日目は三〇分、二日目は一時間、三日目は二時間という具合に徐々に行わなければ日焼

を起して、定植後の発育が極めて悪くなる。われわれの目で見て葉面が白く見えるような日焼は極く烈しい場合であつて、一寸見た位で判別のつかぬような程度でも影響は大きいから必ず徐々に馴らす事が大切である。更に定植期が近付くにつれて降霜の心配さえなれば、夜間に覆を全く取除いて冷温に馴れさせるべきである。

(2) 定植後の水分不足に耐え得る様に苗に抵抗力を持たせる。

移植回数の少い場合は、特に根の数が少く、且長く広い範囲に延びて定植後の植傷みが多くなるものである。従つて定植の約十日位前苗と苗の間を縦横に床土の深さに庖丁のような刃物で根廻しをするか、充分灌水して置いて「ズラシ」と称し最初の一列を框外に取出し大きく土をつけてその空いた部分に順次苗をズラシで移し、最後

第2表 普通苗、硬化苗の乾燥に対する抵抗力（ルーミス）

作物の種類	苗の種類	A処理の生存率 (%)	B処理の生存率 (%)
とまと	普通苗	86.7	60.0
	硬化苗	100	66.7

(註) A処理…苗取後6時間乾燥して定植後灌水したものの
B処理…定植後1回灌水しその後14日間乾燥状態をつづけたもの。

A処理では普通苗が約1割3分枯死したのに硬化苗は枯死したものが1本もない。B処理では差は殆どないが硬化を行つたものは100本に対し6~7本枯死したものが少い。

蔬菜農家にとつて定植は極めて重要な仕事である。定植とは、苗が今まで人工的に加温された温床から、天然の気象状態の本煙に始めて移し植えられる事であるから、いわば、親の厚い庇護の下に育つた小鳥が始めて巣立をする際、親鳥が細心の注意を払う様に、われわれは親鳥と同様の気持になつて操作しなければならぬ。折角丹精して育てた立派な苗も、定植操作の良し悪しがその年の作柄を左右する事になるから充分注意して取扱ねばならぬ。苗自体の側から見ると、定植とは一体どういう事なのか、苗に及ぼす定植の影響を予め知つておく心要がある。

定植操作が苗に及ぼす影響

一定植によつて根が切断されるから水分養分の吸収が困難になる。断根率の一例を示すと第一表の通り。

第1表 甘藍苗定植時の断根状態（熊沢、南川）

育苗法	根の重量		
	苗取前(瓦)	苗取後(瓦)	断根率(%)
無移植	4.36	2.12	51.4
1回移植	3.82	1.86	51.4
2回移植	3.67	2.43	33.8
3回移植	4.51	3.58	20.7

割合に断根の少いと思われる甘藍に於ても移植しないもの及び1回移植のものは約5割即ち約半分、2回~3回移植のものでさえ約2割~3割の根が定植によつて切断される事になる。

四 地上部の茎葉は天然の荒風に曝されかね、従つて水分が不足勝ちになる。

一定植によつて根が切断されるから水

分養分の吸収が困難になる。断根率の一例を示すと第一表の通り。

地上部の茎葉は天然の荒風に曝されかね

ための手段であつて、強化させて丈夫になつた茎葉に葉面撒布を行つて、栄養を充分

葉面撒布する際の尿素（粒状のものは薬

定植の時期は蔬菜の種類により異なるのは当然で、低温に耐えるもの程早く、生育に高温を要するもの程遅いのである。札幌地方における大体の基準を第三表に示す。

定植時期の決定

ように充分に行わねばならぬ。灌水の不充分な場合は例え定植を一日延ばしても、完全に手行った方が定植後の活着が良好である。

は冷水を避け出来るだけ温度の高い溜置水を用いるが良い。

4 植込の深さ

植込の深さは可能な範囲で浅くすべきで、温床内にあつた時より余り深植となるのは良くない。深植となればなる程根部の地温が低く且つ酸素が少くなるので活着が悪い。徒長して足の長くなつたものは自然深植となり勝であるが、このような場合は、図一のように頸部を斜にして植付けるべきである。

第3表

種類	菜類の 定植期	日中平均温度(℃)	備考
かんらん	五月下旬	10以上	低温に強いから早生種は特に早目が良
とまと	六月上旬	15以上	夜間五度(℃)位の低温は支障ないが 晩霜に注意。
ななす	六月中旬	18~20以上	温床内で延び過ぎる心配さえなけれ ば、むしろ遅目ににして充分外気温が上 昇してからの方が活着が良い。
うり類	六月中旬	20以上	

定植時の注意すべき事項

石け一二石二斗に溶かし坪当五升位を用いるのであるが、試験によつてその効果に差があり未だ研究の域を脱しておらぬ。従つて全面的に推奨するまでに至つていない。使用時期は両者共定植前三日位が良く、尿素は噴霧器を用いて葉の両面から撒布し、ホルモン剤は如露で床土に灌注する。

く。苗が温床内にある中であれば相当綿密な管理も出来るが、一旦本畑に定植され

中々薬剤撒布も出来兼ねるものであるから「アブラムシ」「アカダニ」のための接触剤（例、ロテゾール六〇〇～八〇〇倍、マラソン乳剤の二〇〇〇～二五〇〇、アカダニは石灰硫黄合剤一〇〇倍がよい等）葉に噴霧を残す害虫の予防に毒剤（例、砒酸鉛斗当

2 定植前床土への灌水

ダイセーント斗当一〇匁、ザーラム斗当一二
匁等)等を予め撒布しておく事も又、大切な

簡単な事であるが極めて大切で、定植の少くも五～六時間前に床土の底まで行渡る

と称している。この隙燃酸肥料の効果が特に大きいといわれてゐる。従つて実際の場合は腐熟下肥を五倍位に薄めたものに過石を一〇~一五匁(約一握)位混ぜて用うる等が一般に行われてゐる。灌水に用いる水

栽培を有利に導く秘訣である。

